絵　本
テキスト創作塾
通信　№2

推敲の一方法

第１回「独創性」その１

ビーゲンセン・作

物事の創作とは、創作のオリジナリティとは、他にない作品を作るということである。創作には初めての意味もあり、それはそのものズバリ、「独創性」になる。だから自身の五感と感性を駆使し、自分ならでの世界を書くことが必要不可欠になる。

出版界には２作目の壁があるといわれている。芥川賞や直木賞の受賞作家が、１作品だけで終わり２作目が出ないことも少なくない。ある新人絵本作家に聞いた話である。その作家は１作目の絵本が注目をあびて、相当の自信をつけたようにみえた。訪ねてきた折に、「多数の出版社から出版依頼が舞い込むと思ったが、反応がまったくなかった。原稿を持ち込んでも素っ気ない態度に愕然とした」と。

これも２作目の壁なのだ。２作目の壁を破るには、２つ目の独創性を出すことだ。「話のタネ・アイデア・テーマ・書きたい話の芽」を見つけ絵本を創る。そこにどれだけ独創性があるかどうかである。

着想からストーリー展開、文章に、キャラクターに、絵に、デザインにと、多方面に亘るが独創性を出さなければならない。

絵を一目見ただけで画家が分かる絵本もある。井上洋介、太田大八、馬場のぼる、五味太郎、村上康成、高畠純、長谷川義文、新井良二、おかだちあき、よしながこうたなど、多数の画家がいる。

第１回「独創性」その２

ビーゲンセン・作

文を読んだだけで作家がわかる絵本も多くある。文体や言葉の使い方にその作家独特の切れがあり、思わずうなってしまう。

谷川俊太郎（詩人）

・シミ

妬みと怒りで汚れた
心を哀しみが洗って
くれたが　シミは残った
洗っても洗っても
おちないシミ　今度は
そのシミに腹を立てる
真っ白なこころなんて
つまらない　シミのない心
なんて信用できないと
思うのは負け
惜しみじゃない
できればシミもこみで
キラキラ
したいのだ

やなせたかし（絵本作家）

・百年残したい言葉

なぜ、東京は乱雑で町はめちゃめちゃなのか。なぜ、ほとんどの印刷物は奇妙なのか。なぜ、文学も漫画もポルノ化するのか。なぜ、文化人がギャンブルに熱中して、子どもにギャンブルするなというのか。なぜ、婦人誌はセックスの記事ばかり書くのか。なぜ、幼児の本が、あんなにけたたましいのか。なぜ歌謡大会で少年少女が発狂したような奇声をあげるのか。それが生き甲斐なのか。それが生きるってことなのか。

なぜ、女子大教授が学生といっしょに酔っぱらって、ぼくはなんにもしていないというのか。なぜ、救世の宗教家が、テレビに出て、ニヤニヤ笑い、自分の著書を売りつけようとするのか。

もちろんぼくらは天使じゃない。ぼくらは聖人じゃない。しかし、これらの現象に対して精神は加速せずにはいられない。

君はどうなのだ。

第１回「独創性」その３

ビーゲンセン・作

絵を見ただけで誰の作かが分かるものがたくさんある。独創を効かせやすいのでしょう。それがその画家の特徴であり、独創性なのだといえる。

今回は田島征三、新井良二、長谷川義史の３作を採りあげる。この画家の絵は見間違えることはありえない。勿論、器用な画家もいますし、一概には断定できません。

永井郁子氏にビーゲンセン作の絵を描いてもらった。１作ずつ画法を変えて描いてある。ちぎり和紙風あり、版画風あり、浮世絵風あり、棟方志功風ありだった。器用なのかもしれないが、マックを使って描くからできる技かもしれません。

でもこのようにストーリーに合わせて絵のタッチを変えるのも、とても魅力的だ。

2023 年 6 月 17 日
絵本テキスト創作塾事務局；発行